

舞台では光が主役、裏方イメージを払拭する照明家。

GENTA IWAMURA

LIGHTING ARTIST

光と影——これほど私たちの日常に満ち溢れているから、その存在を強烈に感じる機会が少ない代物はない。何気なく点けたり消したりしている灯りひとつで、室内の雰囲気や左右し、人の心をくつろがせたり不安にさせたりする。

映画や演劇など視覚芸術の世界は、光と影のマジックが最も必要とされる場だ。暗黒の中でどんなに素晴らしい演技が展開されていても、光が無ければ見ることができない。光と影を操るマジシャン——照明家の役目は一見地味で目立たないものではあるが、役者や美術をより引き立て、強くアピールするために無くてはならない存在だ。岩村原太さんは、関西を拠点に世界的規模でも活躍する若手照明家のひとりだ。フリーの照明家でありながら作家性を強く打ち出した彼の仕事ぶりは、職人的照明家が大多数を占める演劇シーンでは異彩を放ち、今大いに注目を集めている。

千葉県は焼き物の窯元の家に生まれた岩村さんは、実家の仕事を継ぐことを期待され、京焼、清水焼の本場・京都の大学で陶芸を学ぶために上洛した。その彼が、照明の仕事との初めての出会いはたまたま学内のミュージカル・サークルの公演で、照明を担当したのがきっかけだった。

「元々モノを作ることが好きでしたから、京都芸大の工芸科では陶磁器作りを専攻してました。ところが、土の持つ重々しい質感や不透明さに今ひとつのめり込めなくなっていたんですよ。そんな時出会ったのがミュージカル・サークルでの照明の手伝いだったんです。その時の演目は「オズの魔法使い」。だんだんやっけているうちに光そのものに惹かれたし、自分でもでき

るかなと思うようになったんです。」

ミュージカル・サークルで照明を担当するようになり、他校の演劇サークルとの交流の始まった。折からの演劇、小劇場ブームというこももあり、演劇、パフォーマンス関係の脈がどんどん増えていった。照明の仕事で初めてギラを貰ったのが、現在岩村さん自身も美術と照明スタッフとして参加している劇団迷夢迷住の「最も過酷な愛情」(06)から。大学を卒業と同時に無門館の照明家として働くようになり、本格的に照明の仕事に取り組み始めた。

「無門館はそもそも学生の演劇サークル相手の貸しスペースだったんですけど、ちょうど演劇ブームもピークの頃でしたので、色々な劇団の人たちと出会うことができたね。その頃から照明で何かを表現できないかと考えるようになったんです。」

何しろ照明は、舞台の人物や装置をより効果的に引き立てることが第一と考えられるため、そのためには職人的手腕や技術がどうしても優先される。人間、装置があつてこそその照明であり、どうしても裏方にまわらざるを得ないし、革新的な仕事ができにくい。関西でもフリーで活躍する照明家は多数いるが、照明をひとつの表現行為までに高めようとする人は皆無に等しい。岩村さんも、自分の表現を求めると同時に自然と無門館での活動枠からはみ出さざるをえなくなり、やがて独立。現在はフリーで活躍する一方、前述の劇団迷夢迷住のスタッフという二足草鞋で頑張っている。そんなアーティストのような彼の仕事ぶりが各方面から注目されるようになり、維新派や舞踏集団・山海塾といったメジャーな劇団で照明家として参加。特に山海塾は、'90年のワールドツアーより参加するようにな



り、公演した国々で様々な舞台を観る機会にも恵まれ、勉強になったという。「天兒さん(牛大・山海塾のリーダー)は自分の舞台に関しては完璧主義者で、すいぶんしこかれました。それと、欧米と日本での照明の解釈の仕方の違いも、向こうの舞台を色々観てわかりました。アメリカの照明はほとんどジョーアップ用という感じで、それに比べて日本の照明は良く言えば融通無碍というか、悪く言えば曖昧というか、もっと色々な解釈が可能なんです。」

最後に一番好きな光は何かをたずねてみたところ、「月光、街灯、抽象的な言い方ですが『見えない光』といった答えが返ってきた。」

「太陽光は強過ぎて、手からこぼれ落ちてしまいうような印象なんです。その点月光は、すくい取れそうな感じが好き」と、詩的な表現で答えてくれた。若き照明家は詩人でもある。

ライター/今江ユリ

光に形を与える光のアーティストは、
詩人の心の持ち主
岩村原太

BORN in 1965

1965年生まれ。京都市立芸術大学美術学部工芸科陶磁器専攻卒業。大学在学中より舞台照明による表現活動を開始。作品発表を行なう。大学卒業後はアートスペース無門館のスタッフとしての勤務を経て、フリーの舞台照明家、美術家として活躍。劇団迷夢迷住の照明、美術スタッフの他、舞台表現集団GLWを主宰。'90年より山海塾のワールドツアー・メンバーとして参加。北区在住。

